

紀要50周年特集号によせて

学 長 北 出 藤 雄

『時が解決する』とはよく言われることである。50周年記念行事も、どうなることかと思っていたが、教職員一同の御尽力で、滞りなく終了することができ、ほっとしている。

懸案の博士課程も、先に提出した関係書類が、年末近く承認された。関係者の御労苦にお礼を申し上げたい。これからは内容の充実ということになる。

紀要は研究実績の一つを示すものとして、対外的にも極めて重要であると考えている。

先頃美術工芸研究所を中心とした金箔調査が、インド北部で行われ、それに参加する機会を得た。伝統あるインドの製箔技術、羊皮紙、箔打道具、箔を用いる絵画、工芸等の製作の実態、それらが実際使用されている城塞（宮殿）等も多く見ることができ、興味はつきなかった。

その一つ、技術の相似について、九谷焼との関連で述べて見る。

1. 九谷焼で箔から金泥をつくる方法と、インドの処理方法は同じであった。
2. 金磨き（艶出しといった方がより実際的かも知れぬ）に瑪瑙^{メノウ}を使用する。
3. より描線の質にこだわる人は、九谷でもインドでも自身で筆を作ろうとする。

等のことが挙げられる。多分に技術の伝播、交流に併うものと思われる。

由来材料の選択、技術の向上は、作品の質を高めるし、より高度な或は異った表現に対する欲求から、材料、技術の新らしい開拓が行われる、という関係があると思う。

制作、創造を本旨とする本学において、このような制作と技術に関連した論考が、紀要の中に多く寄せられることを期待したい。